

平成13年度年次晩餐会 華やいだ雰囲気の中か懇親



13年度を振り返って挨拶する大塚博美会長



2001 年 (平成 13 年)
12 月号 (No. 679)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目次

平成13年度年次晩餐会…………… 1
報告

- 第27回自然保護(委)・自然保護
全国集会 大台ヶ原で開催…………… 4
- 総務(委)・新入会員オリエンテ
ーション…………… 6
- 92同期会・山行火打山…………… 7
- Climbing&Medicine…………… 7

支部だより

- 東海支部・中高年高所登山隊ガ
ングスタン峰同時登頂…………… 8
- 秋田支部・全国支部懇談会参加
と信越の名山めぐり…………… 9

東西南北

- 幻のカラコルム峠…………… 10
- カナダ再訪の山旅…………… 11
- 五年間のアカゲラ観察記…………… 12
- 俳句・ブナもみち…………… 13
- 俳句・鹿…………… 13
- 海外の山…………… 14
- 図書紹介…………… 15
- 図書受入報告・新入会員…………… 17
- イギリスにおける登山助成金…………… 18
- 会務報告…………… 21
- INFORMATION・ルーム日誌…………… 23

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時
年末年始休業…………… 12月29~1月6日

■内親王の誕生を祝う

平成十三年度の年次晩餐会は十二月一日午後六時から、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール三階「北辰」で、五百二十人の会員が出席して開かれた。この日、皇太子妃雅子さまが女の子をお子さまを出産された。皇太子さまのお喜びは、いかばかりかと拝察しつつ、いつにもまして華やいだ雰囲気での懇親を楽しんだ。若い人の活躍が目立った晩餐会でもあった。

■会長挨拶 会員六千人を超える

冒頭、大塚博美会長は、ことしを振り返って、次のように挨拶した。

一、とにかく内親王の誕生をお祝いしたい。おめでとうございます。日本山岳会は、この一年間に百七十人の新しい会員を得て、六千五百人となった。しばらく横ばい状態だったが、やっと六千人の大台に乗せた。平均年齢は六十歳と昨年よりまた一歳ふえた。若年会員がふえるよう、あきずに執念深く対策を講じていきたい。二〇〇五年の「百周年」を控え、五月には記念事業の企画プロジェクトチームを立ち上げた。チームリーダーのもと枠組みをまとめている。来春には会員にアウトラインをお知らせできるようにしたいと思っている。ルームが手狭になっており、拡充する必要があると考えていたところ、同じ建物の二階に2LDK(十五坪)の空きができたので借



新永年会員は14名 永年会員証が手渡された

り増すことにした。談話室、編集室、資料室などとして利用していきたいと思う。

一、海外登山については、九月の同時多発テロの影響が出ている。ひとつは、中国登山協会からの提案で予定していたチベットの未踏峰であるシマカンリへの偵察隊派遣。もうひとつはナムチャバルワの東にあるサンルンの登山が延期となった。日本山岳会の海外登山基金の援助で桜門山岳会が計画していた。しかし、七、八月には、ガッシャーブルムI・II峰の連続登山に成功、また東海支部がローツェ南壁の冬期登攀を開始した。

日印合同での東カラコルムの踏査の準備も進んでいる。

一、第四回秩父宮記念山岳賞は、登山の運動生理学を研究され実践的な成果をあげられてきた山本正嘉さんに贈呈することとなった。また石川直樹さんに会長特別賞を贈ることとした。北極から南極までカヌーやスキー、自転車を乗り継いで踏破されたばかりでなく、世界七大陸最高峰を最年少で登頂されたことを評価するものだ。

■永年会員の紹介

四十人の物故会員に対して黙祷した。心からご冥福をお祈りいたします。続けて新しい永年会員が発表された。新永年会員は十四人。小倉董子会員、室賀輝男会員、梅棹忠夫名誉会員が出席され、それぞれ大塚会長から永年会員章が手渡された。新永年会員を代表して小倉会員は「十八歳の時に上京、早稲田大学に入学した。女子は入れないということだったが、先輩の決断で山岳部に、そして日本山岳会に入会した。永年会員としては最年少かもしれない。人の和と自然に感謝することの大切さを教えていただいた」と挨拶した。

新永年会員

津川昌平(三八八五)、藤井保(三九〇六)、榎本進(三九〇七)、小倉董子(三九〇八)、大久保勝己(三九一〇)、藤木高嶺(三九一五)、室賀輝男(三九二五)、原田幹市(三九四六)、大内来三(三九五四)、古田初太郎(三九五八)、梅棹忠夫(三九六三)、竹内堯(三九七二)、北村武彦(三九七三)、小林雄次郎(三九七五)

■石川会員に会長特別表彰

第四回秩父宮記念山岳賞と会長特別表彰の表彰式があり、大塚会長が山本会員、石川会員に表彰状を手渡した。山本会員は「人間を対象とする科学であり、実に多くの人の協力を得た。感謝したい」と挨拶。また石川会員は「つい先日までマイクロネシアにいた。星や風を頼りにした航海技術を勉強していた。山に登るのも川を下るのも海を渡ることも同じであり、自分の身で自然を感じ取っていきたい。多くの人に感謝したい」と語った。

昨年は、山本俊雄会員が会長特別賞を受けた。チョモランマに六十三歳という最高年齢で登頂され

た。会長は日本の元氣印だと言った。これに対し石川会員は大学四年生だ。若さを発揮しての行動が特別賞につながった。

続いて、新人の紹介があった。新人を代表して、高橋未玲会員が挨拶した。大学三年生である。日本山岳会の平均年齢を下げたことは確かである。「空には鳥、森には獣、川には魚」という言葉が好きだ。里山を残して欲しい。豊かなかけがえのない自然を愛し、山を極めていきたい」と挨拶、盛大な拍手で迎えられた。

恒例の鏡開きは、大塚会長のほか、山本正嘉、石川直樹、木下是雄、田中文男の各氏がおこなった。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。恒例になってしまった。山田二郎名誉会員の音頭で乾杯し会食にはいった。山田名誉会員は乾杯に先立ち「内親王の誕生を祝い、安全登山、会員の健勝を祈念したい。そして、これは献杯ということになるが、同時多発テロの犠牲者を忍びたい」と語った。

ことしの晩餐会には、全国二十五支部から百五十八人が出席した。会食をはさんで、それぞれの支部



上・新入会員を代表して会の平均年齢を下げた大学3年生の高橋未玲会員が挨拶 右・恒例の鏡開きは秩父宮記念山岳賞授賞の山本正嘉会員、会長特別賞の石川直樹会員らによって行われた 左・和やかに談笑する会員たち



の活動とともに紹介された。支部の活動は活発である。北海道支部は第二回JAC自然児学校を新冠町で開催した。山陰支部は支部設立五十周年を迎えた。石川支部は九月に全国懇談会を片山津で実施した。来年は広島支部が開催予定。宮崎支部は「みやざき百山」を刊行し宮崎日日新聞社の出版文化賞を受けた。東海支部はローツエ南壁への冬期世界初登攀に挑戦する。紹介されるたびに会場のあちこちから応答の声が上がリ、大きな拍手がそれに重なった。

■科学委員会が活動紹介

隣接する慶雲の間。科学委員会の活動がパネルで紹介されていた。委員会は、一九八〇年に故西堀栄三郎氏の提唱で設置されたという。パネルには、シンポジウムや探索山行、講演会などの活動が紹介されていた。アルパインフォトクラブは「日本の山登りは、環境との共生」を抜きにしては考えられない」としエコロジーを考える写真を展示。さらに日本山岳会が所蔵しているビデオが映写された。

一階の瑞光の間では、午後二時三十分から、明治大学山岳部・炉

辺会のガッシュヤールムI・II峰連続登頂の報告会があった。日本山岳会の海外登山基金助成対象登山である。ことし七月八月にI峰とII峰の連続登頂に成功した。登頂の様子をビデオで鑑賞、また登頂にいたるまでのハードな訓練などについて高橋和弘隊長の話があった。

第四回秩父宮山岳賞を受賞された山本正嘉会員の講演があった。山本会員は運動生理学という観点から登山を研究してきた。トラブルを予防し、より安全・快適・健康的に登山するためには身体をどう扱えばいいか、またどのようにトレーニングすればよいかを考えるのだという。「登山のトラブルの発生は年齢・性別に関連がない。トレーニングを積めば誰でも信じられないような能力を身につけることができる」と、豊富なデータをもとにした研究成果の紹介があった。

翌日の懇親山行は、東京・奥多摩の「日の出山」で行われた。地方支部からの参加者四十六名。山頂ではトン汁に舌つつみを打ち、晩秋の一日を楽しんだ。

(写真・今村千秋 文・高橋重之)

報告

REPORT
12月日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

自然保護委員

第二十七回自然保護全国
集会 大台ヶ原で開催二〇〇一年度全国集会は十月六
日(土)、七日(日)の両日、関西支部主
管「大台ヶ原・大峰の自然を守る

84名が参加して活発な討論が展開された

会」の全面的協力を受け、大台ヶ原山麓の奈良県川上村にて「大台ヶ原の自然保護活動」をテーマに開催された。参加は首都圏および岩手、秋田から熊本にいたる十二支部の自然保護委員と熱心な会員、地元大台ヶ原・大峰の自然を守る会の会員等総勢約九十名の参加となった。初日視察二日目に講演、討論を行った。

大台ヶ原の貴重な大自然は、一九三六年二月一日に吉野・熊野国立公園に指定され、国民の財産として後世に残されることになった。だが戦後にいたって、高度成長・経済開発優先の波にのまれ大峰・白川又林道の問題で大きくゆれた。

本会では一九七六年の第二回自然保護全国大会上高地集会以この問題が取り上げられ、深くかわるることになった。当時の織内信彦

副会長をはじめとする執行部は、翌年六月の現地視察後に「大峰・大台からのアピール」を採択し、行政へ働きかけた。九月には西堀栄三郎会長および山本良三委員長名で「大峰・白川又流域の林道建設中止の要望並びに質疑について」を奈良県知事に提出した。七八年六月再度、県に要望書を提出し、七九年五月には当委員会と奈良県当局の直接の話し合いにより、計画の縮小、林道路線短縮・路線変更などが受け入れられ、大きな成果をあげることができ、日本山岳会ならではの活動と高い評価を受けた。

四半世紀が過ぎ、昨年の第二十六回全国集会(百名山ブームの自然保護に及ぼす影響について)がテーマ)において大台ヶ原山岳観光開発の諸問題が関西支部より報告された。

内容は「登山道とは似ても似つかぬ「空中回廊」と称される鋼の橋梁式階段木道が膨大な費用をかけ施設され、さらなる延長工事が進行中である」。公聴会などで十分な説明と討議もないうまま、行政主導でなし崩しに進められた。またトウヒ林の立ち枯れ衰退につい

て、整合性ある研究調査も脆弱のまま、その原因をシカの食害によるとし「害獣として駆除(殺戮)する計画が進行中で、そのうえ無意味ともいえる巨大な防鹿柵(鋼製のフェンス)を設置した」というもの。行政の説明はそれぞれ「公園訪問者の踏圧から植生を保全するために歩行のルートを固定する」「シカを適正数まで駆除し、そのうえ柵をしてトウヒ林の苗を移植する」としている。利用最優先の、まさに自然を無視した事態と発表された。

景観阻害も含めて、自然保護と利用はいかにあるべきか、今年の全国集会以直接取り上げることになった。

集会初日の六日(土)、参加者は午前九時大和上市駅前集合。二班に別れ大台ヶ原の状況視察に出発。珍しく好天に恵まれ秋色に染まりかけた背景の中、A班五十二名は大台ヶ原・大峰の自然を守る会長・田村義彦氏(当会会員)の解説と森本(幸)、森本(繁)両来住氏の案内で、中ノ谷からの旧道を三津河落山・ナゴヤ岳・巴岳・日出ヶ岳・正木嶺・尾鷲辻・大台ヶ原駐車場まで視察。トウヒの原生林



大台ヶ原山の最高峰日出ヶ岳から正木嶺を取り巻く「空中回廊」

と巨大な防鹿柵「ゾウの檻」、工事
中の防鹿網、敷設された「空中回
廊」の実情をつぶさに見てまわっ
た。

B班は大台ヶ原・大峰の自然を
守る会の谷幸三事務局長と井出氏
の説明と案内で駐車場から日出ヶ
岳・正木嶺・尾鷲辻・大蛇クラ周
辺を巡った。二十五年経って状況
が好転しているどころか、一層悪
くなっている現状を知らされるこ
とになった。予算ありきの悪しき
公共事業と全く同じ現状に参加者
から嘆きの声があがった。

懇親会は同日午後七時より川上

村「ホテル杉の湯」にて、阪下幸
一関西支部自然保護委員長の司会
で始まる。長尾悌夫副会長から「個
人として大台ヶ原の認識は薄い部
分もあったが、自然保護は日本山
岳会の定款のひとつの柱でもあり
山岳人として高い意識で取り組ん
で欲しい」と趣旨の挨拶があった。
吉野林業発祥の地元川上村の大谷
一二村長は、自然と融和しながら
生活する村の現状から皆伐問題で
揺れる吉野川源流三之公谷三八二
杉を「水源地の森」として村で買
収、原生林は絶対に伐採しないと
明言。さらに先人たちの意思を引
き継ぎ購入を続ける決意を披露し
満場の拍手を浴びた。

吉村健児北九州支部長の乾杯の
音頭の後、参加者全員の自己紹介
から賑やかに進行、視察の見聞に
議論を沸かせ、懇談は午後九時ま
で盛り上がりおひらきとなった。

二日目の七日(日)は、安井康夫本
部自然保護委員、篠崎仁自然保護
委員長の司会で午前八時より討論
会を開催した。芳賀芳郎副会長よ
り「自然保護は山登りとともに日
本山岳会の活動の両輪であり、太
い柱にしていかなければならない。
長い歴史を持つ英国アルパインク

ラブには公正・平静・忍耐強くと
いったスピリッツが営々としてい
る。会員の社会的ステータスが高
いのは、その中の公正という精神
に尽きる。ここに集まった人たち
は自然保護のパイオニアかつリー
ダーである。登山活動も自然保護
もフェアであってこそ評価につな
がる。この場は社会的責任の意義
、行動の評価の再認識をするよい機
会である」と挨拶され、阿部和行
関西支部長は豊富な体験に基づく
独自の自然保護論を披露。四十年
前の大台ヶ原登山体験を導入部に
「自然にかかわる多くの問題に、日
本人をはじめとして東洋人は意識
が低い傾向にある。欧米と比較す
ると国土の広さと人口の比率に関
係があるようだ。林業の衰退も個
性のない自然にしてしまったわが
国の人の住処の連続といった現状
にその要因があると思う。人間の
意識が加わることによって、知ら
ないうちに自然のコントロールを
妨げている」など海外との比較、
姿勢の違い、環境行政の方針の不
明など、自然保護は究極政治問題
となってしまうていると結んだ。

基調講演は「大台ヶ原の自然保
護」と題して大台ヶ原・大峰の自

然を守る会、田村義彦会長が、利
用しながら保護を図る理想を淡々
と時には熱っぽく語った。「二十
八国立公園の中で全域が国有地
(本州製紙より戦後買い上げた)の
公園は大台ヶ原だけである。しか
しながら国有化後の大台ヶ原は、
環境省がコントロール可能なのに
年間三十万人といわれる観光客の
利用ばかり優先し、バス・マイカ
ーの排気ガス等の影響等を無視。
巨大な防鹿柵「ゾウの檻」、防鹿網、
登山道に敷設された「空中回廊」
など自然保護とは程遠い行政がま
かりとおっている。恥ずかしい限

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。
こだわりの無名ドメースを発掘!! 今、ワイン界に新風を送っています。
SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行き
ドメースから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。
ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
<http://www.winedou.co.jp/>
トップコンテンツのマキノレポートは山とワインのレポートです。
メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社 **牧野 菊生** ●日本ソムリエ協会関東支部ワインアド
(会員8299番) バイザー・コンクール入賞 ●フランス食
品振興協会(ソベクサ)認定コンセイエ(小
千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL: 0476-93-2200 ●ワイン総合研究所
FAX: 0476-93-7548 公認名譽ワインマスター

りである。この自然を守るには入山規制しかない。利用しながらの保護には無理がある。官民一体となつて解決しよう」と訴えた。

第一部では「大台ヶ原に学ぶ」と題する討議に入り、「空中回廊」の環境省の方針の確認、緑のダイヤモンド計画や、百名山登山道整備計画による事業形態への疑問点や問題、野性動物や植生等自然のためどんな施策がよいか、適正な費用で自然に最小限の負荷での登山道修復がなぜできないのか、登山道整備はいかにあるべきか。防鹿柵「ゾウの檻」については、鹿の生態調査(個体数・DNA・環境容量)の整合性、トウヒの植生調査と現況、ミヤコザサと鹿の食性、公園内のオーバーユースによる被害・ドライブウェイと観光開発被害等の事実調査、排気ガスや酸性雨、三宅島の噴火によるSO₂の影響、全国規模の継続的調査の必要性などの提案で活発な討論がなされた。さらに自然保護の調査研究にも会の予算付けが欲しい、環境省の担当部署にメールで意見を送ろう……等々、熱意ある積極的発言も続出した。

第二部は各支部報告。澤井政信

本部委員が「早池峰インターハイ山岳競技問題の経過について」のその後。河西瑛一郎担当理事(高尾の森づくりの会代表)が「植林と森づくり」。吉村健児北九州支部長が「支部の紹介と自然保護」。

小川務東海支部委員長が「支部の年間活動」を発表。東海支部の勉強会を数多く開催して知識レベルを上げている活動と、昨年問題になった鈴鹿山系のペンキ標示の除去作業が成功裏に終了した報告は爽かであった。宮本数雄福井支部長は自らの体験を踏まえた登山道整備の方策とその成果を、生態をよく学んでバランスのよい規制が必要と報告した。関西支部桑田結会員(ブナを植える会会長)はブナ植林の活動状況を発表した。

さまざまな質疑応答の後、閉会挨拶に立った篠崎仁自然保護委員長は「この二日間で学んだことを全国へ広げよう。今から山岳人としてできることをしよう。日本山岳会だからこそできる保護活動について積極的提言を委員会にお願いしたい」とし、日本山岳会自然保護委員会として本日の問題に今後どう対処するのかの質問に対し「アピールや要望等、取り急ぎ

行動を起こさなければならぬ事は承知しているが、当会および委員会の総意はこの場でまとめられない。預かりとし本部委員会でよい議論を尽くし示したい」と締めくくり、五時間余に及んだ集会后午後一時に無事閉会、二日間の全国集会の幕を閉じた。(大蔵 喜福)

(詳細は自然保護委員会発行「木の目 草の芽四六号」以下の特集に掲載予定)

総務委員会

平成十三年度新入会員 オリエンテーション開催

フレッシュ会員二十七名参加

十月二十七日午後二時より、平成十三年度入会者(対象会員番号一三三九五〜一三五四五までの百五十一名)のオリエンテーションが、本会ルーム会議室において開催された。大塚会長、村井副会長も列席、新入会員は越後、静岡、山梨、信濃など各支部からの参加者も含めて二十七名が出席した。

総務担当西村常務理事の開会の挨拶で始まった。大塚会長の「新入会員の皆さまへ」と題する講話は、かつてのエヴェレスト遠征の



全国から27名のフレッシュ会員が集う

折りの逸話から、昨今の富士登山・フルマラソンを通じて、現在の体力を知った山登りを目指していることなど、体験談に基づくアドバイスであった。続いて総務の高原理事によるビデオ説明など会組織と活動全般にわたる紹介、さらに各委員会・同好会による案内が行われた。

記念撮影をはさんで新入会員の自己紹介があり、最後に恒例の懇親会となった。新入会員の皆さんからも「自慢の酒」を手土産にい

ただいて、和やかな中にも大変活
 気にあふれたいかにも「日本山岳
 会」らしい歓談の輪が広がった。
 午後六時半過ぎ、盛況裡に幕を閉
 じた。
 (實田 統亜)

92同期会

第十四回山行 火打山

今回の山行は、都心からはちょ
 っと離れてもよいかから味わい深い
 登山をしようではないかというこ
 とになり、余裕を持った計画を立
 てることにして十月十九日(金)、二
 十日(土)の二日、妙高高原の「京大
 ヒュッテ」に連泊することに決め
 ました。集まったのは総勢十一名、
 日本百名山の一つ火打山(二四六
 二尺)を目指すことになりました。
 結成以来十年の歳月を歩み、そ
 れぞれがこれまでの数々の山行に
 思いをはせ、心に期するところが
 あって、思いを込めてザックに詰
 めるべきものを詰めて一堂に会し
 ました。

無風快晴、またとない好天に恵
 まれ、握ればさらさらと音をたて
 そうな乾燥した空気の中、秋色ま
 っさかりの火打山の落葉樹林、高
 谷池周辺のセピア色に彩られた湿

原、三六〇度展望のきく山頂から
 の眺めなどを心行くまで堪能して
 きました。なんとたつて十周年記念
 登山はすぐ目の前、雲ひとつない
 紺碧の空に祝福され本当に縁起い
 いと、一同自然の恵みのありがた
 さと授けられた幸運に酔いしれて
 しまいました。

山でかいた汗はさっぱり流そう
 ではないかということになり、麓
 の「杉野沢温泉」まで足を延ばし、
 ここでゆつたりとひと肌の湯につ
 かり、夜は再びヒュッテに戻りそ
 こで持ち込みの酒を並べて大宴会
 となりました。なんせところは伝
 統と格式のある「京大ヒュッテ」、
 話題はもっぱら日本山岳会の行く
 末と私たちの十周年記念行事のこ
 となど、格調高い話題に花を咲か
 せ、夜の更けるのも忘れ語り明か
 しました。

ここ数年他の同期会の方にも参
 加を呼びかけ、今回も97同期会か
 ら二名の方に参加していただき、
 団欒の輪にももちろん加わってい
 ただきました。うぬぼれかも知れ
 ませんが一期生を自負しての同期
 会連携の試みは着実に手応えを感
 じつつあるように思います。

(実田 俊雄)

Climbing & Medicine 4

マダニの防ぎ方

秦 和壽

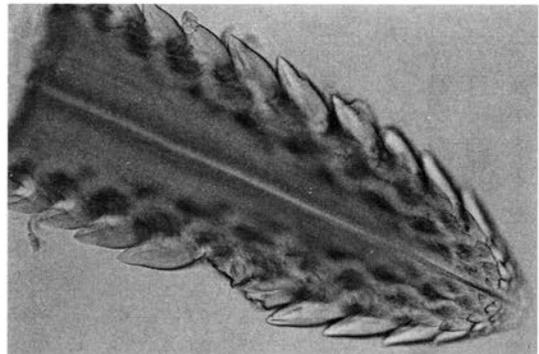
山で藪歩きをすると、マダニが皮膚に寄生
 することがある。これは俗に笹ダニと呼ばれ、
 沢登りするヒトにはよく知られている。本来
 は山の獣に寄生するものであるが、同じ哺乳
 動物であるヒトにも寄生し吸血する。季節的
 には春から秋で、体長は2ミリから8ミリ程
 度の大きさである。茶褐色で扁平。皮膚につ
 いても痛くも痒くもないので気づかない場合
 が少なくない。

寄生は数日以上皮膚に吸着する。部位は身
 体全体であるが、特に脇や脇の下、さらに陰
 部などにつくことが多い。通常は単なる虫刺
 され程度で済むが、しっかり皮膚に吸着した
 場合は、これに気づいて無理にとろうとす
 と、マダニの口器(口下片:写真)が皮膚の

中に残ってしまい、硬結などの原因になるこ
 とがある。

こうなると、外科的に処置するしか方法は
 ない。また、寄生部を中心に大きな紅斑が出
 ることがある。専門医の診断が必要になる。

寄生の予防は、藪歩きをしたときなどに、
 しっかり吸着する前に風呂に入り身体をよく
 洗うことである。寄生を発見したときは、マ
 ダニをゆっくりもみ、少しずつ引っ張り取り
 除く。虫体にベンジンなどを塗布することも
 効果的である。



マダニの口下片

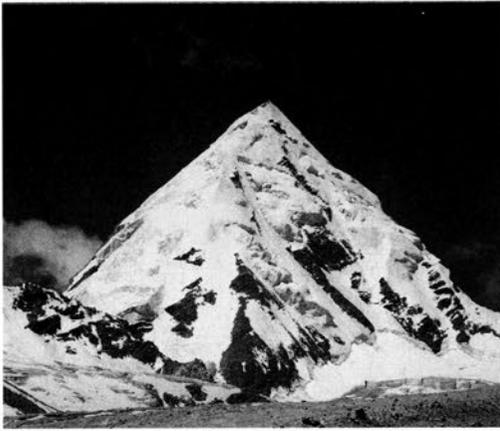
JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

東海支部

創立四十周年記念事業 第七次中高年高所登山隊 ガングスタン峰同時登頂



ガングスタン峰北壁 左手の稜がルート of 東稜

支部設立四十周年記念登山の一つとして、インドヒマラヤに派遣した二つの登山隊は、ラホール地区のガングスタン峰の南西稜、北壁（東稜）から同時登頂に成功した。

一九八八年から始まった中高年を主体としたインドヒマラヤ登山は、今回で九隊に達し、初登頂三座を含む六〇〇〇峰九座に登頂している。五十歳以上の登頂者は、延べ四十名（うち女性十一名）に達している。

体力が衰え、技術も低下している中高年隊のタクティクスとして、三五〇〇峰付近の高所順化に重点をおき、今回は三三〇〇峰のジスパに六日間滞在する順化隊を編成した。高所ポーターも多めに雇用し、彼らの能力に期待した。

■南西稜隊

七月二十五日、両隊はジスパを出発。南西稜隊はピリング川に沿ってキヤラパンの後、七月二十七日、ガングスタン氷河の末端四六五〇峰にBCを設営した。

支部では、創立三十周年を記念して、一九九〇年にガン

グスタン峰に登山隊を送り、南西稜から七名全員が登頂している。当時に比べ、氷河は後退しつつ悪化していて当時のルートは使えず氷河を大きく迂回して、八月一日、五二〇〇峰にC1を設営。三日、

上部雪原五六〇〇峰にACを設営した。この間、荷上げは高所ポーターに頼り、隊員は高所順化に専念した。天気はあまりよくなく、雪やミゾレが降る日もあった。悪天候でACに一日停滞後、五日、第一次登頂隊の田中（守）、中田、

田辺の三名は、高所ポーターたちとともにコルから南西稜に取り付き、ロープを固定しつつ、一足先に登頂した北壁隊の待つ頂上に達し、感激の握手を交わした。頂上はガスの中だった。

七日には、小雪の舞う中、鈴木、辻、上田の第二次登頂隊が登頂した。田中（太）は体調不良で五八〇〇峰から引き返した。

南西稜はポピュラールートとはいえ、一九九〇年と比べ、氷河のクレバス、氷壁と化した斜面に悩まされた。

■北壁隊

バライ川を遡り、七月二十六日、北面氷河からの流れの合流点四〇

五〇峰の草原にBCを設営した。

その後荷上げを続け、七月二十九日、北面氷河の右氷河のモレーン上四九〇〇峰にC1を設営した。北壁へのルートにとつた右氷河は、五二〇〇峰付近からクレバス帯となり、大小のクレバスを避け東稜のコルを目指して登る。ここに三ピッチロープを固定した。

北壁は、高さ八〇〇峰の氷雪壁で構成され、クレバス帯から見上げると迫力がある。正面壁にルートを見い出せず、昨年の鈴木 の偵察から、北東稜か、東稜を予定していた。八月三日、東稜のコル直下五四〇〇峰の雪面を削ってACを設営した。ルートは東稜をとることにしたが、ここから見上げる東稜は傾斜がきつく、氷壁は垂直に近く見え、緊張する。AC設営には、高所ポーターたちの活躍が目覚しかった。この日初めて南西稜隊と交信ができた。

四日、池田、飯田は高所ポーターたちとルート工作を行い、固定ロープを五〇〇峰延ばした。この日隊員六名全員がACに集結した。五日、水野、柳原、池田、飯田と高所ポーターたちで頂上を目指した。昨日のルート工作終了点か

らさらに固定ロープを追加し、十一時二十分頂上に達し、南西稜隊と感激の再会を果たした。

六日、二次隊はアタックを断念したため、ACを撤収しBCへ下山した。

東稜は、雪の下はカチカチの水で、スノーバーはほとんど使えず、アイススクリューが有効だった。

池田は、自宅に常圧低酸素室を設置し、日本出発後十三日目に登頂した。

(長坂 博)
総隊長・鈴木常夫(66) マネージヤール・菊地啓一(52)

南西稜隊長・田中守之(72) 隊員・田中太門(68) 中田晴紀子(65) 辻章行(64) 上田京子(61) 田辺元祥(41) 医師・小野久光(70)

北壁隊長・水野起己(50) 登攀隊長・柳原徳太郎(54) 隊員・志賀勤(67) 志賀傳(64) 飯田尚人(31) 医師・池田淑夫(49)

秋田支部

**全国支部懇談会参加と
信越の名山めぐり**

全国支部懇談会石川大会への参加の往復路に、信越地方にある深田久弥の百名山(雨飾山、火打山、

妙高山、高妻山)登山を組み入れて実施することになった。九月二十八日午後八時、佐々木支部長のもと八名でレンタカーに乗り、一路長野県小谷村へ。

二十九日、予定より早く雨飾山登山口に到着。夜の明けきらぬ登山道をヘッドライトの灯りを頼りに登山開始。尾根道に取り付く頃にはすっかり夜が明け、紅葉がはじまりかけたブナ林の急坂をゆ

つくり登る。荒菅沢から急坂の連続となり、石仏が並ぶ山頂へ八時三十分到着。山頂からは白馬から槍の穂まで北アルプスと戸隠連山、頸城の山々など大パノラマが広がっている。人気の山なのか、下り

は多くの登山者とスライドする。下山後は道の駅小谷で地ビール、地元名物で昼食を済ませ、片山津温泉の支部懇談会会場へ。先に到着していた岡田、北林両支部員と合流した。

全国集会は心のこもった石川支部会員一同の歓迎セレモニーが行われ、百名山の写真展が大会に花を添えている。

三十日、岡田、北林両支部員や他支部の会員に見送られて北陸道を北上、新潟県妙高山、火打山へ

向かう。十時五十分、笹ヶ峰登山口から登り、高谷池ヒュッテにザックをデポして火打山へ。山頂は霧に包まれており眺望はきかなかつたが、満足感を胸に秘め、高谷池ヒュッテに戻る。台風の影響で風雨が激しくヒュッテにぶつかり明日の天候が懸念される。

十月一日、昨夜来の風雨は衰えていた。高谷池ヒュッテから黒沢池ヒュッテを経由して妙高山へ向かう。紅葉の大倉乗越で霧の晴れ間から妙高山頂が眺められる。燕新道の合流地点から雨が強くなり山頂まで降り続く。しかし山頂では時折風雨が弱まり、ガスの切れ間から束の間の展望ができた。

山頂の妙高大神に登頂の感謝と山旅の安全を祈念して下山、戸隠へ向かう。今宵の宿は日本山岳会会員の経営する戸隠小屋だ。夕食は家族ぐるみのもてなしである。フランス料理をはじめ珍しい料理を肴に明日の快晴を祈って乾杯。宵は星空だったが、夜半より雨になり朝方まで降り続く。

二日、天気予報では前線が戸隠周辺に停滞とのこと。やむなく高妻山登山を中止して美ヶ原へ向かうことにする。ところが、松本か

ら美ヶ原への道をどこで間違えたのか、ヘアピンカーブの狭い山道をビーナスラインまで走ることになってしまった。

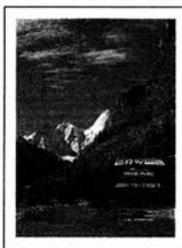
美ヶ原高原駐車場から標高二〇〇〇の雲上にある大放牧場の遊歩道を歩き、最高峰の王ヶ頭へ。北、南、中央アルプス、浅間、頸

城連山など中部山岳の大パノラマを満喫し、上田ICから帰路につく。上信越自動車道から高妻山、妙高山、火打山が雄大に裾野を広げて見送ってくれた。

十月三日〇時二十分、秋田着。

(佐藤 博)

●カタログをご請求ください。

 <p>▲総合カタログ</p>	 <p>▲NZの山旅</p>	 <p>▲日本の山旅</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------

▲総合カタログ ▲NZの山旅 ▲日本の山旅
国土交通大臣登録旅行業第490号/財団法人日本旅行業協会正会員 ③ 株式会社 美ヶ原サービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F TEL.03-3503-1911
大阪/TEL.06-6444-3033 名古屋/TEL.052-581-3211 福岡/TEL.092-715-1557

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、原稿は長すぎないようにお願いします)



イラスト・宇都木慎一

幻のカラコルム峠と中国辺境の道

古市 進

本年二〇〇一年の晩夏、当会会員である増田昌司氏を中心とする



クジ下流で見られた新田道路の段差

一行七名は、カラコルム峠訪問を最大の目玉として、中国の新蔵公路をラサからカシュガルまで、完全な横断を試みた。

言うまでもなくカラコルム峠は古くから広く知られてはきたが、現在インド・パキスタン間の緊迫した情勢の余波もあって、入域許可取得の困難な地域になっている。われわれ一行の場合も、出発前に聞かされた地元軍管区の許可は非公式なまま旅立つことになってしまった。

ところで、グループ共通の主たる目標に加えて、私には個人的にちよつとした関心事があった。ラサからたどる新蔵公路の最終段階であるマザー・イエチエン間は、私にとつては二年前の立教大学隊によるガツシャブルムII峰遠征の

帰路、百年ぶりとも言われる大水害による道路壊滅で大変苦勞したところである。当然現在は復旧しているはずであるが、その復旧のされ具合には関心をもち続けてきた。

さて、成田空港から上海経由で八月十九日ラサ入りした一行は、高度順化を兼ねてのんびりラサ観光中の翌二十日、衝撃のニュースを聞かされることになった。軍の演習期間という理由で、カラコルム峠への入域が不許可になったとの新疆側旅行社からの連絡である。ここまで来たところで今回の旅の最大の目玉が消えて、一行全員の落胆は大きかったが、計画の中心である増田隊長の心中は察するに余りあるものであった。しかし一行中の約半数の者はチベット初見参であったことを考えて気を取り直し、目玉の重点をカイラス周辺とガンジス源流の仏教遺跡三つ(グゲ、ピアン、トンガ)に設定して、旅は続行することになった。

八月二十一日、ランクル三台、トラック一台でラサを出発した一行は、二十四日にはマナサロワール湖近くのパルガに到着、二十五日はカイラスの巡礼路を山懐へと

たどった。幸い好天に恵まれ、カメランたちは十分満足したようであった。二十六日は新蔵公路から南に外れてガンジス河の源流に向かった。途中では遥かにガルワルの山々を望み、ナンダ・デビとカメットを識別することができた。ここで遺跡見学に二日を費やした。三つの遺跡のうちピアンとトンガは発見されてから日が浅く、目下調査中の部分もあり、現地当局の特別の配慮で入域が実現したものである。

八月二十九日、新蔵公路に復帰し、三十日には西チベットの中心獅泉河に到着、日程調整のため二泊した。公路とは言うものの、これまでのところでは半分くらいは轍の跡が道路といった感じで、四五〇前後の高原風景もめり張りには欠けていた。一方で、越えてゆく大小の峠は多く、最終的に公路全体では三十にもなった。

獅泉河を過ぎるとチベット文化からウイグル文化への移行が目立ってくる。このあたりがアクサイチン高原と言われるところで、本来ならばカラコルム峠目指して一時公路にお別れする分岐のはずだったが、今は幻に終わった。その

代わりと言うには役不足だが、右
手遥かに白雪の崑崙山脈が連なり
目を楽しませてくれる。

九月二日、奇台大坂という峠で
地形的なチベット高原とはお別れ
である。翌三日、さらに幾つかの
峠を越えてヤルカンド河の源流に
下れば、やがて思い出深いマザー
との再会である。

二年前、マザーを過ぎてから最
初に越えるセラク峠の下りは相当
に荒れていたが、車は何とか通行
できた。用が足りていたからか、
現在復旧の程度はごく控え目なも
のに見えた。対照的に、前回の最
難関であったクジ下流の道路は
確かに復旧の名に値する整備がな
されていた。以前の道路はゴルジ
ユ帯の崖を削って水流の上約五尺
に建設されていたが、大増水によ
り路盤全体が広い範囲にわたって
流失したのであった。今回の新し
い道路は新たに崖を削るのではな
く、水際を一尺ばかり埋め立てて
固めたものであった。写真は新旧
道路の段差の一例である。現在の
ところ路面はよく整備されていて
車は快適に走れるが、平常水位と
の差は小さく、増水には全く無防
備に見えた。もっとも大増水は稀

な地域なので、もしも同じような
被害が出たら、再び同じような補
修をすればよいという方針かもし
れない。道路破壊の後も尾を引く
濁流の中をラクダ頼みで脱出した
往時を偲び、胸の痞が一つ取れた
気持ちであった。

同じ日の夕刻、イエチエン郊外
の公路の基点を通過し、新蔵公路
三〇〇〇の旅を無事終了した。

カナダ再訪の山旅

原 満紀



AAC前会長を囲んでYOHU会有志

昨年夏、アルバータ峰登頂七十
五周年記念トレッキングで、Bコ
ースのスタンリー・ミッチェル・

ハット滞在組に参加しました。す
っかり意気投合した同じ釜の飯を
食べた仲間たちと、半年前から準
備に着手。目標としていたカナダ
山岳会のエリザベス・パーク・
ハットが借りられたので、有志十
二名で九月中旬、ラーチ（カラマ
ツ）の黄葉最盛期に合わせてトレ
ッキングに行ってきました。

現地に住むカナダ山岳会（ACC）
C）会員水野晴子さん（カナディ
アン・ロッキー・ハイキング案内
の著者）と何回か連絡を取り合い、
同時多発テロ事件の余波で往路航
空機の確保には難儀させられたも
の、予定コース全てをクリアす
ることができました。

山小屋到着初日には、ACCの
マイク・モーター前会長がは
るばる私たちを訪ねてこられ、一
緒に小屋に泊まりました。同夜は
持参した日本酒で乾杯し、英語と
日本語のちゃんぽんで夜遅くまで
旧交を温めました。

滞在前半はあまり天候に恵まれ
ず、オペーピン・プラトーに向か
う岩場のトラバース時には小雪の
舞う、寒い一日でした。それでも
午前中には、昨年はお目にかかれ
なかつた真っ白のマウンテン・ゴ

ート（カモシカの仲間とか）に、
「ローレンス・グラッシー」の記念
プレート近くで出会えたのは素敵
な思い出になりました。日程の後
半は快晴で、全山黄葉に輝くラー
チバリーの景観に迎えられるなど
今回のトレッキングの念願を十二
分に果たしてくれました。

思うに、最近のJACは横のつ
ながりの同期会が盛んで、縦のつ
ながりは今ひとつ、という心境で
した。そこで、来年もここカナダ
のアシニポインに遠征することを
前提にして、旅行最終日、モレン
レイク・ロτζジのサロンで「YO

追加設定 7744 4444444444444444 4444444444444444

**ゆのたけきりマンジャロ登頂を
アンボセリ国立公園17日間**

期間 2002年2月16日(土)~27日(水)
旅行代金 555,000円 (東京発) 募集 15名様限定

サバンナに堂々と聳え立つ、アフリカ大陸最高峰「キリマンジャロ」。
登頂前にはキリマンジャロの絶好の展望台として有名なアンボセリ
国立公園で、キリマンジャロの雄姿と大自然を満喫していただきます。
この機会にぜひアフリカ最高峰へ…。

お申し込みを **アミューストラベル**

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 1-22-2 新宿サンエビル B1
電話 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258
大阪 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617
広島 082(502)2525 福岡 092(735)8855

「H〇会」を結成したわけです。昨年カナダに同行した他のグループの有志も加わっています。

カナダトレッキングでお世話になった方たちの中には、現地ではまずできそうにない「シャワークライミング」を一度日本に出かけてやってみたいと考えている方もいます。私たちにその手助けができるかどうかわかりませんが、来年二〇〇二年は奇しくも「国際山岳年」とか。われらがグループでは、これを会の目標の一つとして前進してゆきたいと念じています。有志よ、応援してください。

五年間の アカゲラ観察記

平野 友重

本州で通常見られるキツツキ科の鳥は、アカゲラ、アオゲラ、コゲラ、そしてブナ林に生息するオアカゲラの四種です。

私が野鳥の写真を撮り始めて一年ほど経った四月初旬、購入して間もないニコンの六〇〇ミレンズと、七キ以上の重量のあるジッツオの三脚をザックに入れ、水芭

蕉の群生地まで巷間知られている蛭ヶ野高原(岐阜県)に車を走らせました。大日ヶ岳に登ろうと幹線道路をはずれ、脇道に入ると幸先よく、木の枝にいる一羽のアカゲラを見つけました。

よく見ると口に虫をくわえています。急いで車をバックさせ、アカゲラの行動を注視すると、アカゲラは警戒しながらも移動しました。アカゲラが動いた辺りをよく見ると、道沿いの一本の枯れかけた松の木に穴が二個あいています。ひよつとすると、と思いフロントガラス越しに前方を凝視していると、先ほど見失ったアカゲラがまた姿を見せましたが、明らかに私を警戒しています。

一度切ったエンジンをそつとかけ、前方の松から目を離すことなく一〇分ほど車をバックさせると……、入りました。アカゲラが二つある穴の上部に入りました。急いで降車し、ザックからカメラとレンズ、そしてテレコンパーターを取り出して三脚に装着し、車の陰に隠れるようにカメラを構え、アカゲラの姿をファインダーにとらえては夢中でシャッターをきりました。

アカゲラの姿を十四、五枚フィルムに収めて、やつと私にも余裕が生まれ、観察姿勢に入りました。雄と雌、二羽が交互に虫をくわえてきて巣穴に入って行きます。巣穴に入る前に止まる枝が一定なのも分かりました。もう少しいい写真を撮ろうと欲を出し、テレコンパーターを外し、カメラを装着したまま三脚を持ち上げ、少しずつ少しずつ車を離れ、松の木に近づきました。止まり木に焦点をあわせ、シャッターをきる準備をして待つと、アカゲラは虫を口に持っているのに巣穴から四、五分離れた枝に止まり、五分たつても十分たつても巣穴に入りません。

巣穴の中の雛への影響を考えて私が車のところへ戻ると、巣穴にさつと入ります。車とカメラポジションの間を四、五回行ったりきたりしましたが、カメラポジションでは一枚もシャッターをきれませんでした。

この年は週二回、計四回蛭ヶ野に足を運びましたが、テレコンパーターでの写真と米粒大の姿の写真しか写せませんでした。

翌年三月下旬、三方岩岳の麓でカモシカと追いかけてこをした帰

りに、蛭ヶ野の昨年場所の立ち寄ってみると、アカゲラがいました。双眼鏡を片手に様子を見てみると、昨年使用した上の穴から四〇分ほど下部にあるもう一つの穴に出入りしています。何もくわえていないので、抱卵中と分かりました。時刻も遅く、光線も写真に適さないので、一時間ほどアカゲラの姿を見て楽しみ、家路に着きました。

その三日後から、週二回、午前五時に起床し、朝食の弁当を持って蛭ヶ野に車を走らせ、七時から九時までの二時間、長いレンズのついた重い三脚をアカゲラの顔色をうかがいながらいろいろ移動させ、また車を一対でも巣穴に近づけようと苦心しました。私の姿を少しずつ認識してくれたのか、雛が巣立つ直前に、ようやくテレコンを外せる距離で撮影できました。三年目の春、まさかと思いましたが蛭ヶ野に足を運ぶと、なんとまた、アカゲラがいました。この年は上の穴を利用しています。驚きました。上下二個の穴を一年交代で利用していたのです。早速家に帰り、洋裁好きな妻にブラインドを作ってもらい、一週間後に三脚

俳句 白神山地 ブナもみぢ 小林 碧郎

山毛櫨明かり幹を伝ひて秋時雨
分け入りてけもの臭ひ山葡萄
尾根に立つ山毛櫨亭亭と蔦紅葉
山毛櫨の根に潜み舂めき月夜茸
日に翳す黄葉や山毛櫨の力櫛
遺されて原生樹海黄葉照る
(十月六、七日きのこ山行にて)



俳句 鹿 川崎 精雄

鹿啼くや奥秩父てふ甲斐の山
岩重畳瑞牆山の鹿啼けり
鹿啼くや夕日たゆたふ笹の原
鹿啼けり道探しみる鼻の先
塩分の谷へ下れる鹿の道
野犬群鹿を襲ひし修羅の跡
鹿垣の戸口結ひたる藤の蔓

を持つて接近すると、何とたいして警戒することなくカメラボジションが取れたのです。同じ番なのです。脚にリングをつけたわけではないので、科学的立証は不能ですが、アカゲラの番が私に見せる反応は、明らかに同じ番を表しています。

この年、せっかく妻が作ってくれたブラインドを使うことなく、満足のいくアカゲラの様々な姿態がカメラに収まりました。

その翌年、四年目の春には、二度目の下部の穴でした。抱卵初期から観察、撮影に入った三回目の時でした。雄が巣穴に入って間もなく、巣穴から少し離れた枝に止まっていた雌の横に、いつの間にか雄がいるのです。あれっと思つて見ていると、雄がグズリながら雌ににじり寄りしました。と、巣穴から猛烈な勢いで別の雄が飛び出し、雌ににじり寄っていた雄が、垂直に近い飛翔で、上空へ上空へと逃げて行きます。巣穴から飛び出したもう一羽の雄が、どこまでも、どこまでも追いかけます。遙か上空、米粒よりさらに小さくなって姿が見えなくなりました。時間にしてほんの数秒の出来事、何

が起きたのか瞬時には理解できませんでしたが、私も男女の機微がわかる年齢、雄二羽の姿を見失つてから発生した事態を理解しました。飛翔の仕方、そのスピード、いずれもかつてみたことのない飛び方に、雄の嫉妬心の激しきを感じました。まさに殺戮せんといわんばかりの勢いでした。

雌はというと何事もなかったように涼しい顔をして巣穴に入り抱卵を続けていました。その後、四十分経過しても雄が帰らないので、私も三脚をたたみ帰路につきました。

この二つの穴の枯木に営巢したアカゲラは、五年にわたり私の被写体になりましたが、六年目に道を挟んで隣接するレンゲツツジの咲く草場が、観光牧場に造成されたため二度と見る事ができなくなりました。五年の撮影の間には、アカゲラが虫ばかりでなく、蟻を頻々と食べることに、雌が生後ある日数を経過してからは、木の实も食餌することを観察しました。

山野を歩きはしましたが、一期ピークを忘れ、山ヤから鳥やに走った私とアカゲラの出会いの顛末です。

6,000m以上の1,215峰を全て所収 世界初の精密登山地図 完成!!

宮森常雄 著 (ヒンズークシュ・カラコルム研究会)
カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図 Mountaineering Maps of the KARAKORUM & HINDU-KUSH by Tsuneo Miyamori
B全判地図13葉

(付)カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究 (宮森常雄 雁部貞夫 共著)
A4変型判・上製美装ケース入 385ページ

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成! 全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全域の知識を提供する。

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

海外の山

驚くべき
シルクロードの旅

ボリビアの4500mの高地に行く中山 (2001年4月)

江本 嘉伸

まずは友人に届いた最新のががき(十一月二十六日着)を紹介しよう。大判はがきに小さな文字がぎっしり書きこまれている。

十一月一日にトルコに入国して今日は十三日目の11/13です。今日はエルシンジャンという町を出発して五五^キ進み、とある村に暗くなりかけて着きました。その村人に泊まらせてくれと頼むと「いいよ」と言われたもののトラクターで二十分も移動(山の方へ)し……

トルコの冬は寒い。はがきの文章から中山の旅の現実が伝わってくる。(氷点下に近い朝もあり、薄氷が二回程張りました。今日も二一六〇^キの峠を越え、泊まっている村は標高一六五〇^キだそうです。……実は一昨晩は野宿で、あるものを全部着込んでシュラフにもぐり何とかしのぎました。温度計は四度でした。)

なんと中山は、野宿しながら走って旅をしているらしい。でも、いったい、どこから?

今日まで百二十日、五四五七^キロ^キ(西安から八一三二^キロ^キととなり、イスタンブールまであと一〇〇〇^キロ^キ位です)

そう、四十四歳になったこの旅人は、中国の西安からはるばるトルコまで走りつづけ、間もなくゴールにたどり着こうとしているのだ。

山梨県の電機メーカーをやめたのが、昨年五月。ひそかに「シルクロード走り旅」計画をあたためていた中山はほとんど友人にも言わず日本を発ち、六月はじめシルクロードの起点、中国・西安をスタートした。寝袋と少しの着替えを詰めた小さなザックを背負っての走り旅。片言の中国語会話と筆談で、方角を聞き、毎日の食と住を確保した。

とりわけ夏になって猛暑の中、飲み水をどう得るか、がひと苦労だった。「水」と書いた紙を持って砂漠地帯の国道に立ち、通りすがりのトラックから飲み水をもらってしのいだことは何度もある。

特別に許可を取ったわけではないので、無論、警察には何度も呼び止められた。しかし、写真入りで地元紙に紹介されてからは、その記事をその都度見せ、やりやすくなった。

いろいろな目に会ったが、当面の目的だったウルムチまで二六七五^キを五十二日間かけて走り通した。この後、いったん帰国した中山は、今度は南米大陸走り旅に挑戦する。チリからボリビア、ペルーと四七〇〇^キをやはり野宿しながら九十九日間走った。チリーボリビア国境の標高三九〇〇〜四九〇〇^キの地帯を抜けた時は、高山病で「頭が割れるように痛かった」が、ラパス・クスコ間の標高三三〇〇〜四三〇〇^キの地帯では「順応というのは凄い。最終日はガンガン走りました」と書く。

南米での旅で自信を得たのだろう。今年七月、中山はウルムチに戻り、シルクロードのゴール、イスタンブールを目指して再び走り出した。カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンと中央アジアの国々を毎日五〜六〇^キ、「片言の」ロシア語、ペルシャ語、トルコ語をその都度マスターして、走り続けた。大学院では薬学を学んだ中山だが、語学にも並々ならぬ関心があったようだ。

トルコでは警察に日に六度もチェックされるなど苦労は数え切れない。一方で心優しい人たちの親切は身にしみたし、南米のアタカマ高地で出会った自転車旅のフランス人と、イランではばったり再会するなどの喜びもあった。

一時帰国していた頃、走り旅を綴った克明な日記を見せてもらったことがある。地を這う旅の感想は独特な味があり、知的であった。何よりも一足で走りとおしたというほろほろのシューズに風格があった。

無名の中年旅人、中山嘉太郎。夏、クライマーの山野井泰史と話した時、「中山さんのやっていることは、間違いない今年最大の冒険でしょうね」と、言っていた。同感である。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

赤沼淳夫・著

『四季の心象
燕岳と安曇野』

著者の赤沼淳夫氏は、北アルプス燕岳にある燕山荘の二代目主人であり、安曇野・穂高町に生まれ燕岳を庭として、生活の大部分を過ごした。過去にも数冊の写真集を出している。今回は燕山荘創立八十周年を迎えての記念出版である。写真の数は八十数枚、燕岳山域の山岳風景と安曇野の自然がほぼ半分ずつ、春夏秋冬の順に構成されている。

燕岳特有の花崗岩のオブジェの作品はハツとさせる美しさを、安曇野の草木、鳥、昆虫、田畑など

には他所者には真似のできない理解の深さと温かさを感じさせてくれる。さすがは安曇野の主。

著者は「あとがきにかえて」の中で「これからは残されたこのかけがえのない自然を守り、次世代に継承することがこの地に住む者の責務と思い、レンズを通して、少しでも自然破壊防止の一助になればとの願いを込めて……」と書いているが、十二分に意図が感じられる素晴らしい写真集である。

(茂見 猛)

二〇〇一年五月 東京新聞出版局発行 一〇八ページ 三千八百円

鷹沢のり子・著

『芦峠寺ものがたり』

表紙には、剣岳を背にさわやかに笑う五人の男たちの写真。皆いい笑顔だ。彼らは、立山の麓の芦峠寺の男たち。五十年前に撮られたその表紙の写真を見ていると、ああ、山の男たちはこんなふうにあつたなと懐かしくなるだろう。

この本の舞台は、小さな集落ながら、山岳関係者に知らない者のない山岳ガイドの村・芦峠寺であ

る。著者はこの村に生きた佐伯宗作、佐伯文蔵、佐伯富男という三人の名ガイド(そう、この村の住人はほとんど佐伯姓か志鷹姓なのだ)の生き方を通して、立山の開山以来現在まで常に山と関わり続けてきたこの村の姿を描く。

山と人の関わり方は宗教・探検・観光と、時代の移り変わりの中で大きく形を変えてきた。その中で、時代を超えて、常に誇りを持って山と添うように生きてきた芦峠寺の姿は、現代の一つの寓話である。

(三好まぎ子)

二〇〇一年五月 山と溪谷社発行 二七八ページ 千七百円

慶佐次盛一・著

『北摂の山(上) 東部編』

大阪の北西部に広がる山々を一般に「北摂の山」と呼んでいるが明確な区分はなされていない。また標高において八〇〇メートルを超える山はないが、五〇〇〜六〇〇メートルのいわゆる里山がひしめいている。この地を山城側と播磨側のほぼ中央で東部編と西部編とに分け、今回その東部編が上梓された。

ここでは東端の天王山から西端

の堂床山、また北方は深山までの六十一山が紹介されている。著者の態度は、登って降りた、を主眼にするのでなく、地誌、歴史、寺社や史跡などに幅広く目を配り、読み物としても十分に楽しめるよう編まれている。特筆すべきは、その登り方において、いま流行のマイカー登山を廃したことで、この地理的に割合不便な地域に「電車とバスの公共交通機関を利用して、経済性と自然保護に配慮したエコハイキング、エコ登山」を提唱したことであろう。文は人なりというが、まこと表現されたものの裏に著者の人柄の現れと観るは深読みに過ぎるだろうか。

前著『兵庫丹波の山(上下)』に続くガイドブックのシリーズとして続きが期待される。(柏木宏信)

二〇〇一年四月 ナカニシヤ出版発行 二七〇ページ 折込地 図一葉 二千円

田畑真一・著

『知られざるW・ウェストン』

長い間ウェストン一筋に調査を続けている田畑さんの六冊目の著書である。もちろん、その六冊と

もウェストンをテーマにしている。著者の方法は、前五冊でもそうであったが、ウェストンの著書の中のひとつの言葉、あるいは文章、または写真を取り上げ、その事実関係を徹底的に、微に入り細にわたり調べ上げることである。ともすれば読み飛ばしてしまう個所でも、田畑さんは事実かどうかを調べる。資料を探り、現地に赴き、関係者に聞く、という手間ヒマのかかることを、熱心にやってみてしまふ。そのエネルギーはすごい。怠け者の筆者は、その努力を思うだけでも、気が遠くなり、言葉を失ってしまう。余人にはなし得ないことだ。

こうして掘り起こされた事実はたくさんあり、それらが本書の各ページにあふれている。たとえば、巻頭に載った、立山・雄山神社にウェストンの記帳文の発見などは、田畑さんの粘りがなければ、とても実現しなかつたであろう。

このようなあまりにも細微にわたる調査に対して、評価しない向きがあるかもしれないが、こうした無駄とも思える努力なくしては、新しい発見は生まれないのである。その点は、ものぐさで怠け者の筆

者は、本書によって教えられることと大である。

田畑さんが、ますます「追っかけボーイ」ぶりを発揮して、ウェストン研究の成果をあげてくれることを祈る。

(水野 勉)

二〇〇一年九月 信濃毎日新聞
社発行 二九一ページ 千六百円

藤原咲子・著

『父への恋文』

作家、新田次郎の娘に生まれた著者が、新田の没後二十年になって初めて大好きな父次郎について綴った。幼児の頃、病床にあった母親にはまわりつくことも、甘えることもできなかつた著者は優しい父親に甘えて育った。

十歳のとき、父が直木賞受賞直後の書齋で「お父さんが死んだらね、作家新田次郎はこんな風にして書齋で原稿を書いていたっていうこと、ちゃんと覚えていて、しっかりと作品に残すんだよ」言葉に多少の遅れがあつた娘に心を開かせ、自信を持たせようと文章指導を開始した頃の父の言葉であつた。

昭和五十五年二月の寒い朝、父

は突然、逝つた。三カ月後、著者は、一気に三百枚の原稿を書き上げたが、それは作家新田次郎を語っていないとして発表するには至らず、その後、二十年を経た今「果たして本当に父との約束が守れただろうか」と父に問い掛けつつ発表したのがこの作品である。

母は作家藤原てい、しかし幼少時の苛酷な満州からの引き揚げ体験の中には母との確執があり、それゆえになお一層父を慕う少女であつた著者の、これはまさに父への恋文だと思ふ。(渡邊 玉枝)

二〇〇一年八月 山と溪谷社発行 二五四ページ 千四百円

江村真一・著

『山の描き方 絵姿の百名山』

本書は、これまでの山旅を描いた画文集とは全く異質の山の絵本である。タイトルに「山の描き方」とあるが、これは登山者のためのスケッチ入門書でもなければ、手引書でもない。この山はどこから描けばよいか、どこから描いたら絵になるか、を教えてくれる教科書になる案内書である。

山の絵描きは、山の絵を見ると

まずどこから描いているかを考えながら見る。名山をより一層引き立てるのは、よりよい構図であるからだ。それで山の絵描きは、事前にあつちこつちビューポイントを探して歩くのだが、できればそんな駆け回りはせずに済ませたい。このような多くの願望に初めて応えたのが本書である。

北は利尻島から南は沖繩まで、四十年間山を描いてきた筆者が絵になる山を百名選んだ画集で、まさしく「絵姿の百名山」である。

季節をそろえて春夏秋冬の四章に分けた構成もよい。一山ごとの地図にはスケッチポイントの表示が入り、写生地へのアクセスも載せてある。スケッチャーへの気配りが感じられる好著。(杉田 博)

二〇〇一年十月 朝日新聞社発行 朝日選書685 二一六ページ 千二百円

『新世紀を拓く』

世界十人の山の写真家展

本書は今年豊田市で開かれた表題の写真展の図録である。写真展はフランスで開催された「世界山岳フォーラム」の関連事業として

企画され巡回してきた。世界の十人の写真を一人十点、合計百点を出品している。

山岳地に生活する人々や山岳地の風景、山岳の諸相が、八名の印象深い白黒写真と二名の鮮やかなカラー写真により、個性的で密度の高い作品に撮られている。作品は温もりと山の雰囲気、人と山岳との係わりを感じさせる。

図録最初のアメリカの女性写家ベス・ワルドは登山を始めたのがきっかけで写真家になった。パタゴニアの荒野に見る者を誘う作品である。図録最後のスイス生まれのフーグ・デ・ウルステンベルグは何年も純粹な山村の生活を経験した。アルプスの山村を写した作品である。

この他、ガテマラ、モロッコの作品、水をテーマとした静謐な作品。チベットの人々の生き生きとした表情をとらえた作品。日本からは岩橋崇至が日本アルプスの色彩美を表現している。(三栖 寿生)

二〇〇一年六月 世界十人の山の写真家展実行委員会発行(イタリア国立トリノ山岳博物館発行の原本一六四ページ 日本語解説書三六ページ)

図書受入報告 (2001年10月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
吉尾弘(著)日本勤労者山岳連盟(編)	垂直の星:吉尾弘遺稿集	406pp/20cm	本の泉社	2001	出版社寄贈
丸山晴弘(監修)	山歩きはじめの一步(第1巻)山選び	143pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
福島正明(監修)	山歩きはじめの一步(第2巻)歩き方	143pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
笹原芳樹(監修)	山歩きはじめの一步(第3巻)山の用具	143pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
大森薫雄(監修)	山歩きはじめの一步(第4巻)健康と山の食事	135pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
村山貢司(監修)	山歩きはじめの一步(第5巻)山の天気	143pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
寺田政晴(監修)	山歩きはじめの一步(第6巻)地図とガイドブック	143pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
丸山晴弘(監修)	山歩きはじめの一步(第7巻)山の危険	135pp/22cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
根深誠	白神山地立入禁止で得をするのは誰だ	239pp/20cm	つり人社	2001	出版社寄贈
根深誠	白神山地ブナ原生林は誰のものか	239pp/20cm	つり人社	2001	出版社寄贈
根深誠	いつか見たヒマラヤ:ネパール・チベットの人と暮らし	285pp/22cm	実業之日本社	2001	著者寄贈
菅原達也	山岳句集「雪線交響」	191pp/22cm	菅原達也(私家版)	2001	著者寄贈
松本征夫	シルクロード探遊	357pp/22cm	葦書房	2001	出版社寄贈
佐藤孝三	エベレスト山群:佐藤孝三写真集	79pp/31cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
柏敏明(編)	山嶽寮:甲南山岳部創立75周年記念号	373pp/26cm	甲南山岳会	2001	発行者寄贈
東海支部(編)	ウムドン・カンリ峰初登頂・ダウン峰初登頂 報告書	134pp/29cm	日本山岳会東海支部	2001	発行者寄贈
木下是雄	鹿沢今昔	80pp/19cm	木下是雄(私家版)	2001	著者寄贈
大町山岳博物館(編)	新・北アルプス博物誌:山と人と博物館	401pp/22cm	信濃毎日新聞社	2001	編者寄贈
滑志田隆	風だより山形路:現代やまがた側面記	236pp/22cm	阿古耶書房	2001	著者寄贈
鈴木忠・他(編)	31名ともう一人のキリマンジャロ:山カラ2000プロジェクト	304pp/22cm	トヨタ自動車山カラ隊	2001	発行者寄贈
江村真一	山の描き方 絵姿の百名山(朝日選書No685)	215pp/19cm	朝日新聞社	2001	著者寄贈

イギリスにおける登山助成金 - 基金 (GRANTS)

10月号でアメリカにおける3団体の2001年GRANTS (基金—助成金) の実績を報告しましたが、今回は英国エヴェレスト財団、Mount Everest Foundation (MEF) の紹介、および1998—2001年の遠征助成金の実績とその傾向について報告します。

資料は海外委員会の要請により、エヴェレスト財団のHon. Secretary, Mr. W. H. Ruthvenより送られてきたもので、これをベースにまとめました。

個人ベースでの「新しい領域、未踏への挑戦」が評価の基準になっています。

ヒマラヤ8000m峰のブランド志向や大艦巨砲主義は対象にはしていません。

地域も、いささかグリーンランド偏重があるものの、おおむね全世界に広がっています。

英国らしい伝統を感じさせます。

海外委員会理事・中村 保

将来支援を受けられない。

選考：11月と3月の年2回選考委員会 (Screening Committee) が応募内容を審査する。それぞれの締め切りは8月31日と12月31日である。

【補足】応募した計画は英国山岳協会 (British Mountaineering Council=BMC) およびスコットランド山岳協会 (Mountaineering Council of Scotland) の助成金の審査対象にもなる。MEFとBMCは非常に緊密な関係にあるが、別組織であり、助成も別々に行っている。審査の基準は少し異なる。国家機関であり登山活動を代表するBMCは「クライミング」に重点を置く一方、無報酬の雇員に支えられるボランティア団体のMEFは「探検」に集中する。が、多くの遠征隊が両方から支援をうける傾向は避けがたい。

エヴェレスト財団支援実績の国別比率

1998—2001年 (%は件数の比率)

	1998	1999	2000	2001
	(%)	(%)	(%)	(%)
グリーンランド	16	16	19	23
USA		13	9	13
インド	22	5	6	11
ボリビア	3	5	7	9
チリ	5	3	7	7
ネパール	14		6	7
パキスタン	19	16	13	7
中国(チベット・新疆)	3	10	6	5
CIS(キルギス・カザフスタン)	3	10	3	5

エヴェレスト財団

(Mount Everest Foundation=MEF)

Patron:H.R.H. The Duke of Edinburgh, K.G.K.T.

設立：1953年のエヴェレスト初登頂を契機に設立。
目的：英国およびニュージーランドの遠征隊への支援。対象は高山・遠隔地の山の探検・登山および科学的調査活動。

基金：エヴェレスト遠征の剰余資金およびその後のロイヤルティー。

運営：アルパイン・クラブと王立地理学会により構成 (それぞれから6人ずつ) される運営委員会 (Committee of Management, 1999—2000のChairmanはクリス・ポニントン、2001はリンゼイ・グリフィン) が管理・運営。

助成金：現在までに700,000英ポンドを配分。全ての運営上の仕事はボランティアの職員によって行われている。

対象：助成金の大部分は現在では、中央ヨーロッパを除く、Greater Rangesにおける初登攀や新ルート開拓を計画する冒険的なクライマーにより組織される小規模遠征隊に与えられている。山岳における調査・研究も支援される。各々の遠征隊を評価するにあたっては探検的・革新的であることに特に注意が払われる。

義務：1) 遠征終了後6週間以内に概要報告書と会計報告を提出。

2) その後できるだけ早く最終報告書を提出。これらの義務を果たさない場合は、隊長は

- び新ルートの開拓 (1,000)
7. Darwin Range 2001英国隊—
S. Yetes、南米チリ・フェゴ島
フェゴ島 (Tierra del Fuego) ダーウィン山の探検と初登頂 (1,000)
8. ベトナム2001 (ケービング) —
H. Limbert、ベトナム北東部
Cao Bang & Quang Binh 州におけると洞穴探検の継続 (1,000)
9. Huautla / Cheve 洞穴のダイビング—
J. Mallinson、メキシコ・オハカ州
世界最深の記録をつくるため潜行ルートの探検 (500)
10. 崑崙山脈2001英国隊—
J. Freeman-Attwood、中国・崑崙
Pk 6786m and/or Pk6582mの初登頂、および周辺の未踏峰の探査 (740)
11. SMC 東グリーンランド 2001—
Dr. C. Jones、東グリーンランド
Sussex (2300m) 南壁の初登攀 (590)
12. Charakusa 氷河2001英国隊—
S. Ashworth、パキスタン・チョゴリサGrp
6000mピークの探査と初登頂および K6 (Balti - stan Peak) 北壁の偵察 (中止440)
13. 冬季グリーンランド—
A. Powell、グリーンランド東部
Tupilak (2264m) 北壁の冬季初登攀 (690)
14. Llanberis 2001パタゴニア—
L. McGinley、アルゼンチン・フィッツロイNP
セロ・トーレで南東/南壁/西壁経由の新ルートを開く (640)
15. Greater Trango 2001英国隊—
M. (T) Turner、パキスタン・バルトロ西部
グレーター・トランゴ (c6240m) 東壁1400mの新ルートの初登攀 (740)
16. 英・ニュージーランドRaksha Urai 2001—
A. Thomas、ネパールGurans Himal
Seti 谷から入り探査とRaksha Urai のピーク (c6550m) の初登頂 (840)
17. Kantega南稜、英国隊—
M. Fowler、ネパールMahalangur-Barun
南東バットレスからPeak 43 (6769m) の初登攀 (640)
18. 東グリーンランド氷河調査2001—
H. Prichard、東グリーンランド
Surge-type氷河 (Blosseville Kyst) の地球物理学的測定 (中止740)
19. 英国女子隊 / ボリビア・コルディエラ・レアル 2001—
Dr. A. Pennington、ボリビア
コルディエラ・レアルの中央部探検とNevado

ペルー	5			5
アルゼンチン	3	3	6	2
メキシコ				2
ベトナム		3		2
モザンビーク				2
カナダ	5	10	6	
南極				3
ケニア				3
マレーシア		3	6	
マダガスカル		3		
ノルウェー	3			
助成件数合計	43	37	33	44

助成金額合計 (£) 30,550 31,600 33,850 27,170
(仮集計)

上記の国別分布から、この4年間の趨勢としてアジアの比重が下がっている傾向が見てとれる。なかんずく、2001年はグリーンランドとUSA (アラスカ) への偏りが特徴的である。

2001年エヴェレスト財団支援の遠征計画
2001 EXPEDITIONS SUPPORTED BY MEF
(Mount Everest Foundation)

[上2段太字] 隊名、隊長、場所 [下段細字] 目的、助成金
(単位: 英ポンド)

—2001年9月18日現在の仮集計—

1. グリーンランド200・新世紀のティルマン—
R. B. Shepton、グリーンランド西部
Upernavik 地方遠隔地のピークの初登とBylot島の横断 (助成金なし)
2. コンパス・サポートDronning Louise 2001—
B. Mitchell、グリーンランド北部
人跡まれな地方の初登頂とスキー旅行 (中止)
3. Cochamo ビッグ・ウォールとアルパイン—
Dr. L. Regan、南米チリ中央
2つの顕著な初登攀、ビッグ・ウォールとアルパイン・トラバース (500)
4. Mount Hunter の東バットレス—
M. Bass、アラスカ USA
マウント・ハンター北峰 (4491m) の東壁に新ルートを開く (750)
5. APEXボリビア 2001 (sci) —
K. Baillie、南米ボリビア西部
Chacaltaya Laboratory (5200m) における医学研究 (1,000)
6. Paine South Tower 2001—
M. (T) Turner、南米チリ・パイネ地方
パイネ南塔 (c2500m) の英国人による初登攀および

- コルディエラ・アポロバンバのPupuya山塊の基礎調査、探検、初登頂 (300)
34. ニュージーランド・Kangri Garpo 2001—
J. Nankervis、中国東南チベット
拉古氷河から未踏の5600~6600mピークの初登頂 (940)
35. アラスカ:ビッグ・スリー 2001—
A. Parkin、アラスカ USA
Hunter北バットレス、Foraker南東稜、Denali南壁に新ルート開拓 (中止640)
36. Quitaraju 南西壁—
N. Bullock、ペルー・ブランカ山群
Quitaraju (6040m) 南西壁とAlpamayo (5974m) 新ルートの初登攀 (340)
37. Solu 2001 英国隊—
D. Wilkinson、パキスタン・Rakaposhi E (?)
Solu Brakk (5901m) およびSolu氷河の谷から6000m峰の初登頂 (490)
38. Kangerdlugssuaq Fiord South 2001 英国隊—
P. Bartlett、グリーンランド東部
既調査の地域の探検および初登頂 (中止390)
39. 2001 'Barones' 英国隊—
M. Dickinson、グリーンランド南部
'The Barones' の800m西壁の初登攀とフィルム撮影 (590)
40. Sail Greenland 2001—
A. White、グリーンランド南部
スコットランドからグリーンランドへ航海、Kangikitsaq Fiordから登攀 (490)
41. Smog in Greenland—
M. Lampard、グリーンランド北東部
Franekels Land (73°20'N, 29°W) における初登頂 (640)
42. South Greenland 2001—
M. Heason、グリーンランド南西部
Prins Christian Sundの未踏の花崗岩壁とピークの初登攀 (540)
43. Tagne 2001—
A. Vine、インド・Karcha Parbat Grp
Tange (6404m) (あるいはZaskar山脈の同じようなピーク) の初登頂 (590)
44. Pik Dankova 英国隊—
Dr. P. Knott、キルギス CIS
西Kokshaal-TooのPik Dankova (5982m) 地域での新ルート開拓・初登攀 (640)
45. Siruanch氷河 2001—
C. Knowles、インド・Nanda Devi Grp E
Chalab West (6160m) の初登頂 (640)
- Ch'iyaruqu (6104m) 初登頂 (440)
20. Broken Tooth 2001 英国隊—
G. Hornby、アラスカ USA
Broken Tooth (2749m) の東ピラーの初登攀と北の未踏峰の初登頂 (540)
21. アラスカFake氷河2001—
M. Fletcher、アラスカ USA
Glacier One Cirque (aka 'Fake Glacier') からの探検と初登頂 (740)
22. Cathedral Mountains 2001—
Dr. B. Davison、アラスカ USA
Cathedral Mountainsの未踏の主氷河の谷から探検と初登頂 (740)
23. 湖水地方Quimisa Cruz 2001—
P. Platt、ボリビア・コルディエラ・キミサクルス
Khor Chumaの東、Atorama Glacier北西のピークの初登頂 (300)
24. コルデイエラ・ブランカ2001スコットランド隊—
J. Currie、ペルー
Santa Cruz Norte (5829m) 東壁の初登攀 (300)
25. Nampula Towers モザンビーク2001英国隊—
D. Tumbull、モザンビーク
Nampula州のMlema Towers (500m~1000m) の探検と初登攀 (540)
26. グリーンランド2001ランチェスター隊—
J. White、グリーンランド・Lindbergh
Lindbergh Mountainsの探検と初登頂 (640)
27. Chakula 2001英国隊—
M. Ratty、インド・Ladakh (?)
南東稜経由Chakula (6529m) の初登頂 (440)
28. Arganglas 2001—
Sir C. Bonington、インド・Saser Muztsgh
最高峰、Pk 6789mを含むArganglas山脈の探検と初登頂 (690)
29. Loboche / Ama Dablam—
J. Cartwright、ネパール・Mahalangur-Barun
Loboche (6100m) 北壁とAma Dablam (6800m) 北西稜の直登 (740)
30. Reo Puyuil 北壁2001—
Ms. J-Ann Clyma、インド・Reo Pargial Grp
Reo Puyuil (6816m) 北壁の初登攀 (中止740)
31. 西Kokshaal-Too 2001英国隊—
D. Gerrard、キルギス CIS
未踏のKyokiar山脈の探検と初登頂 (640)
32. Totally Forakered—
I. Parnell、アラスカ USA
Kahiltna West (3912m), Denali (6194m), Foraker (5305m) の新ルート開拓 (640)
33. Cymu ボリビア・アポロバンバ 2001—
O. Thomas、ボリビア

合計 27,170

会務報告

十月理事会

日時 十月十日(水)十八時三十分～

二十一時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、芳賀、長尾、村井各副会長、西村、今村、坂井、高原、高遠、宮下、鈴木、黒川、大野、中村、藤本、河西、鳥居、小川各理事、内田、古市各監事、平林、宮崎、宇田川、鰐坂各常任評議員

委任 松原理事

【審議事項】

一、細則の一部見直しについて (その二) 西村

九月度理事会に引き続き、細則の見直しについて審議、様々な視点より熱心な討議がなされた。主な見直し事項は、①役員改選の手続き(細則七、八条) ②若年会員会費の値下げ(細則十条)の二点。

継続審議

二、支部および役員の英文表記の見直しについて 西村

九月度理事会に引き続き検討さ

れ次のとおり決定した。(カッコ内は現行)

①支部・Section (Branch)

理由として支部は会社の支社、営業所と違い、自由度の高い、しかも地域によってあったりなかったりする組織であり、Branchはなじまない。世界の山岳会でも、米国、カナダ、ニュージーランドなど全てSectionと表記している。

②会長・President (=)

副会長・Vice President (=)

総務担当理事・Secretary

(Honorary Secretary)

財務担当理事・Treasurer

(Honorary Treasurer)

図書担当理事・Director

(Honorary Librarian)

『山岳』『山』担当理事・Editor

(Honorary Editor)

その他担当理事・Director

(Committee)

監事・Auditor (=)

評議員・Council (=)

支部長・Section Chair

(Chairman of Branch)

理由として、基本的に当会は、英国スタイルをとってきたが、法人の理事であることからすると米国スタイルがなじみやすいと判断

した。承認

三、ルームの借り増し 西村

会員の増加、会活動の活発化によりルームの面積が不足してきている。先月、同建物の二階の一室が貸しに出された。これを賃借しルームの面積不足を解消し一層の活動活発化を期したい。物件の概要は次の通り。

〔物件〕 サンビュウハイツ四番町

二一一号室 二LDK 四九・二七㎡(一四・九〇坪)

〔賃貸条件〕 賃料は月額十八万九千円、二年契約。間仕切り壁は取り外し可。

〔使途〕 高原理事をチーフに総務委員会、関係理事で検討し理事会に報告する。

〔予算〕 村井財務担当副会長よりやりくりで特に問題はない。ただし、入会者を増やすことにより、より健全収支となる旨の説明があった。なお、詳細な内容については別添資料による。承認

〔報告事項〕

一、平成十三年度秩父宮記念山岳賞審査状況について 長尾副会長

第一回審査委員会を九月二日に開催した。四件の応募があり、慎重に審査を行っている。次回は十

月十二日に開催する予定。

二、チベットの未踏峰(仮称シマカンリ峰)の偵察について 坂井

九、十月に実施予定だった偵察は、中国登山協会より世界的政情不安により入山禁止になった旨の連絡があり延期する。

三、二〇〇二年「国際山岳年」日本委員会の開催について 高遠

標記委員会(田部井淳子委員長)が、各山岳団体および関係団体より委員が出席して、十月九日開催された。日本委員会の役割の一つは、各団体が実施する行事のネットワークを構築するものである。

各団体の実施概要として、日山協は青少年の自然への意識向上、HAT-Jは青少年を中心とした富士山およびチョモランマBCにおける清掃行事、労山は創立三十周年行事に併せて「グリーンハイク」等の計画を予定している。当会は来年度事業の中で自然保護、医療、科学の各委員会と連絡をとりながら内容を煮詰めたい。

四、平成十二年度海外登山基金助成の一部返納 村井副会長

サンレン峰(日本大学桜門山岳会より申請があり、二月十四日の理事会で助成決定)への入山許可

が、世界状況不安で当面下りない
と、日本大学桜門山岳会より連絡
があった。ついては交付済金(五
十万円)が返納された。

五、支部行事等への参加について
大塚会長、村井副会長

①二〇〇一世界岳都年会議開催記
念アルプス山岳館特別企画展オー
プニングセレモニーが十月六日開
催され、大塚会長、西村が出席。

②第十八回全国支部懇談会が石川
支部主催で、九月二十九、三十日、
加賀市片山津温泉を主会場に行わ
れ、大塚会長、芳賀、村井副会
長、古市監事、高原理事が出席し
た。総数百七十七名、全国二十支
部より出席者があり盛会となった。
六、資料等使用、名義後援許可願
いについて 西村

以下の依頼に対して許可した。
①大町山岳博物館より「新・北ア
ルプス博物誌―山と人と博物館
―」(大町山岳博物館編、信濃毎日
新聞社刊で平成十三年九月末刊
行)に掲載する武田久吉氏の写真
など五点。

②会員・小田直美氏より、雑誌「岳
人」本年十二月号の中の記事に当
会所蔵の書籍「日本南アルプス」
など四冊の外形写真を掲載する。

七、各委員会報告
総務委員会・高原

平成十三年度の新入会員オリエ
ンテーションを十月二十七日(土)午
後二時より開催。各委員会で連絡
事項があれば事前に連絡を。

インターネット小委員会・高原
当会の自然保護・環境保全に関
する取り組みのメッセージを、ホ
ームページに十月中旬掲載する。

財務委員会・村井副会長
①九月度および半期の会計報告並
びに各委員会予算実施状況の報告
(半期の入会者は百四十六名―昨
年百四十名)。また、古市、内田両
監事より、今年度前半期の監査を
本で行った結果、順調に推移して
いるとの報告も併せてあった。

②ペイオフ対応について次回の財
務委員会で検討する。
③アルバータプロジェクト二〇〇
〇の最終収支計算書が報告された。
集委員会・朴元

「白神山紅葉とキノコ山行」を十
月五〜七日、白神山系で実施し
た。四十四名の参加があり、青森
支部の皆さんおよび地元岩崎村、
鯉ヶ沢町の協力で盛会となった。
会報編集委員会・今村

①「山」十月号の巻頭は、英国山

岳会の「山における死」について。
②文字の大きさをポイント大き
くしたことの評判は上々である。
③「東西南北」報告欄への投書
について、字数など原稿の目安を
決めて広報したい。

山岳編集委員会・高遠
「山岳」第九六年(二〇〇一年)企
画内容を資料により紹介。現在原
稿を印刷所に入れ、年次晩餐会に
間に合うように作成進行中である。

資料委員会・鈴木
第五回全国博物館等連絡会議を
十一月十七日(土)午後一時より当会
会議室で開催する。過去四回の開
催により、各博物館の資料交換等
が活発化している。

海外委員会・中村
「The Japanese Alpine News」
(創刊号、千部発行)に対する世界
関係者の反応は概ね良好。特に英
国山岳会、エヴェレスト財団、カ
ナダ山岳会、韓国山岳会、UIA
A、南アフリカ山岳会、英・米の
山の雑誌編集者などより賛辞の反
響があった。次号の予定内容につ
いては資料による。

科学研究委員会・藤本
シンポジウム「中・高年登山者の
高所登山およびトレッキングを科

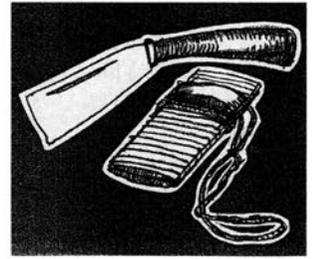
学的に考える」を十一月十七日(土)
午後一時三十分より東京都高年輪
者就業センター「シニアワーク東
京」で開催する。
自然保護委員会・芳賀副会長、河
西

①自然保護全国集會を、関西支部
協力のもと十月六、七日奈良県大
台ヶ原で開催した。全国から八十
数名の参加者があり、熱心に講演、
討議がなされた。
②「木の目 草の芽」四五号を発
行した。

山研運営委員会・小川
上高地の自然の環境教育を中心
としたインタープリテーションお
よびガイドウォークの実施につい
て、環境省、上高地旅館組合より
木村太郎管理人に依頼があった。
当委員会は前向きにとらえ、来年
度より試験的に取り組む予定。

■会員異動
物故
山川 力(七四九二) 01・8・4
船越好文(一九四六) 01・10・10
篠田公平(五二二三) 01・10・21
退会
近藤 薫(七九八三)
内田晴之(一一四九二)

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆第三十三回山岳図書を読む夕べ

図書委員会

横山厚夫さんが『山麓亭百話』(上中下三巻)を完結しました。この機会に豊富な話題をインタビュー形式でうかがいます。

日時 平成十四年一月三十一日(木)

十八時三十分より

場所 日本山岳会集會室

講師 横山厚夫氏

演題 横山厚夫さんに聞く

◆八海山スキー懇親会

集會委員会

恒例のスキー懇親会を六日町八海山スキー場で開催します。

日時 二月九日(土)〜十一日(月)

費用 二万五千元

宿泊 六日町八海山パークホテル

定員 四十名

集合 現地集合・解散

申込 一月十五日までに郵送・フ

◆講演会「自然の浄化能力」

科学委員会

土壌細菌による糞尿やトイレのトイレットペーパーの分解の早さなど「山のトイレ問題」を考える際の参考となる自然の浄化能力について話していただきます。

日時 二月十五日(金)十八時三十分

場所 日本山岳会集會室

講師 隅田裕明氏(日本大学生物資源科学部助教授)

問合せ 織方郁映(TEL〇三・三四 一六・二二六九)

◆関西支部住所変更のお知らせ

新住所 〒五三七・〇〇一四

大阪市東成区大今里西二・五・一

二 大阪セルロイド会館内 TEL&

fax〇六・六九七一・八〇六七

ルーム日誌

10月

1日 総務委員会

2日 アルパインスケッチクラブ

3日 山研運営委員会 高所・海外・青年部ほか合同委員会

4日 会報編集委員会

4日 フォトビデオクラブ 山岳

9日 地理クラブ

9日 常務理事会 アルパインス

9日 キークラブ アルパインス

10日 ケッチクラブ

10日 理事会 常任評議員会 つくも会

11日 学生会部 97同期会

12日 学生部 山の自然学研究会

12日 秩父宮記念山岳賞審査委員会

16日 二火会 学生会部 00会

17日 三水会 山研運営委員会

17日 インターネット小委員会

18日 ジャック93会

18日 科学委員会 資料委員会

19日 財務委員会 青年部

22日 総務委員会 図書委員会

22日 科学委員会

23日 自然保護委員会 96同期会

24日 総務委員会 フィルムビデオ

24日 才委員会 長期改善計画プロジェクト

25日 ロジエクト

26日 青年部 学生会部 98同期会

27日 緑爽会

27日 新入会員オリエンテーション

29日 トイレシンポジウム小委員会

30日 自然保護・山研合同委員会

10月来室者 662名

◆編集後記◆

●過日、東京近郊の高尾山に紅葉狩りに行ってきました。少し盛りを過ぎてはいましたが、まだ鮮やかな紅葉を十分楽しんできました。好天の休日ということもあり大勢のハイカーで大混雑という状態でしたが、時期、場所のせいもあるのでしょうか、来ている人の高齢化に驚かされました。しかし皆さん、マイペースで山歩きを心から楽しんでる様子でした。

●今年の冬は雪の訪れが例年より早く北アルプスでは秋山の予定がラッセルがあったと聞きました。注意して冬山を楽しんでください。(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 679号

2001年(平成13年)12月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビュウハウス四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 ホームページ:http://www.jac.or.jp
 Eメール:jac-info@jac.or.jp
 発行者 大塚博美
 編集人 今村千秋
 印刷 株式会社 双陽社